

外房いすみ

OHARA-HADAKA MATSURI

大原はだか祭り

9/23祝(火)・24(水)

勇壮関東随一

砕ける荒波 勇む若衆

祭りの由来

大原はだか祭りは、古く江戸時代から行われていた。このことは大井区の瀧内神社に祭りの風景を描いた絵馬があり、その絵馬が文久四年(一八六四年)に奉納されたことや別の絵馬に天保十二年とあることから、約一八〇年前の天保年間にすでに祭礼のしきたりや組織が出来あがっていたことがうかがわれる。

行事も十社まいりや浜での大漁祈願、汐ふみ、大別れ式と華やかなものが行われてきた。江戸時代の当地域においてはこれといった娯楽もなく、この祭りは住民の年一回最大の楽しみとして受け継がれてきた。古老の言をかりれば、なにを質に入れても祭りの仕度を整えたといわれる。

当時は仕事の忙しさから、とかくお互いの気もちがばらばらになりがちであった。このためこの地域の領主は唯一無二の娯楽である祭りが集団行動と意志の疎通を図ることができるという重要さを認め、神輿渡御が無事に終わつたことを早飛脚で大多喜城主に報告せしめたとある。



国体本会場に参加



期日も昔は八月十三日から十五日までであったのが改暦により、明治六年からは九月二十三日から二十五日とされ、さらに大正二年より九月二十三日、二十四日の二日にわたって行われるようになった。

この祭りは他に比類ない勇壮な祭りであることから、戦時中、当時の氏子総代が警察に祭りさわぎでもないとして自粛を申入れるに、地域住民の士気を鼓舞するに良いことから大いに活発な祭りをを行うよう署より申し渡されたと伝えられる。

このように勇壮豪快な祭りであるにもかかわらず、近隣の町村の人以外知られていなかったが、千葉国民体育大会の本会場へ出場して以来、にわかに脚光を浴びその後、全国豊かな海づくり大会での天皇皇后両陛下の御前での披露、全国スポーツ・レクリエーション祭への出場を機に、全国的にその名を轟かせている。



祭りの見どころ

現在の行事は、昔のものと少し異なるが、初日二十三日午前八時三十分には大原地区の神輿十社は親神(おやがみ)である鹿島神社に参集、法楽施行、午後一時頃大原漁港へ向う。東海浪花岡地区の神輿もそれぞれ地区の行事後大原漁港へ集結。十八社がそろって五穀豊穡大漁祈願のち午後二時三十分頃から汐ふみの行事にうつる。この汐ふみは、この祭りの三大みどころの一つで、怒涛の中で神輿が数社もみあうさまは勇壮豪快の一語につきる。汐ふみ行事後は、午後五時頃に木戸泉酒造前に全部の神輿が打ちそろったのち、二社が並列で唄い踊り、もみあつて大原小学校校庭へ向う。

商店街は祭り一色

商店街通り約一キロは人と神輿に埋まり、祭り一色に塗りつぶされ、見どころその二の場面展開。

さらに、夕方午後六時頃になって大原小学校校庭に入った神輿は、さながら神輿の競争の如く、力のかぎり、校庭内を駆けめぐり。このさまは、あたかも戦国絵巻の感で絢爛豪華な模様といえる。やがて、夕暮ともなると各神輿はかけ終わりと神輿を何度となく、高々と上げあげ、うけとめ、なげあげるころ、祭はクライマックスの状態を迎える。そして各神輿の提灯に灯りをともすころ、花火が秋の夜空をいろどる合図とともに、神輿を高々とささげ、二社三社とよりそい、哀調おびた別れをおしむ唄「若けもんども別れがつらい 会うて別れがなけりやよい」と歌うさまは、さきほどまでの荒々しさとうってかわつた風情といえる。この大別れ式では大原小学校校庭が神輿、氏子、観衆で埋まり、見どころ三つ目の祭り絵巻がくりひろげられる。この大別れ式は午後七時頃に終わり、それぞれ神輿は、そのまま各地区へ帰るのをこばむかのように午後十時頃まで商店街でもみあう。



翌二十四日は、午前中それぞれ地区の行事後、午後五時頃、木戸泉酒造前に打ちそろい、以後二十三日とおなじ様子で大別れ式にのぞむ。この日は大別れ式後来年の祭りまで、しばし神輿との別れをおしむ若衆が遅くまで神輿をもんだあと、甚句や木遣によって宮入りとなる。

大原はだか祭り神輿渡御経路図

